

カリキュラムの編成

2022.08.25

中井俊樹(愛媛大学)

講師紹介

- 三重県松阪市出身
- 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室
- 大学教育論、人材開発論
- 教職員能力開発拠点代表者、SPOD企画・実施統括者
- 大学教育学会理事、日本高等教育開発協会会長、大学教育イノベーション日本代表



本プログラムの概要

- カリキュラムの編成は、入学から卒業までの期間における学生の学習全体を設計する活動です。カリキュラムをうまく編成できれば、個々の授業の効果は高まり、学生が円滑に学習を進め、卒業時の高い学習成果につなげることが可能になります。
- 大学におけるカリキュラムの編成は、学問の自由のもとで各大学に大幅な裁量がゆだねられています。そのため、すぐれたカリキュラムとはどのようなものなのか、カリキュラムはどのような要素から構成されているのかを理解する必要があります。また、カリキュラム編成の各場面ではどのような論点があるのか、カリキュラムの編成に教職員をどのように巻き込んでいくかといった実践的な知識も求められるでしょう。このプログラムでは、大学におけるカリキュラムの編成の基本的な知識を提供することで、参加者の所属組織の特徴にあったカリキュラムの課題解決の方法を考える機会にしたいと考えています。

到達目標

- 大学のカリキュラムの編成の意義を説明することができる。
- カリキュラムの構成要素を説明することができる。
- カリキュラムの編成の過程を説明することができる。
- 所属組織のカリキュラムの課題に対する解決方法を提案することができる。

専門用語の課題

- 専門用語は十分に整理されて共有されていない
 - ・ 海外の概念からの翻訳、初中等教育との差別化、学問の用語と行政の用語の違い、各大学での用語の定義、使用する人の好み
- 具体例
 - ・ 教学マネジメント、カリキュラムマネジメント、エンロールメントマネジメント
 - ・ カリキュラム、学位プログラム、プログラム、教育課程
 - ・ 準正課教育、準正課活動、準正課プログラム
 - ・ 学習、学修、学び

構成

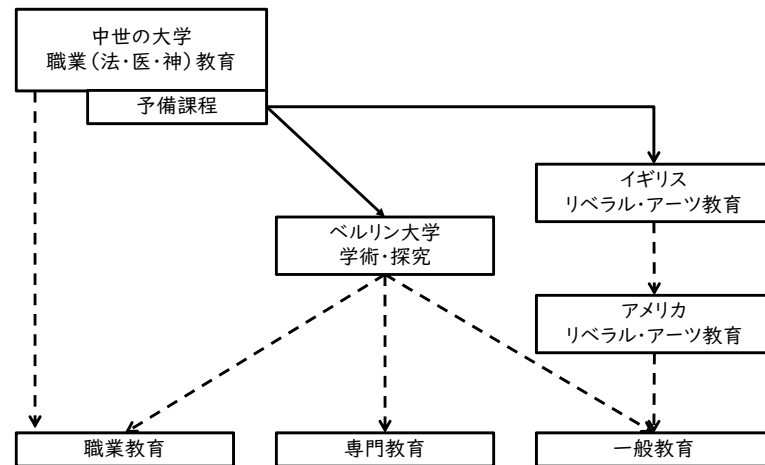
- 大学におけるカリキュラム
- 大学のカリキュラムへの期待
- カリキュラムの構成要素
- カリキュラムの編成方法
- カリキュラムの編成に向けて

■ 大学におけるカリキュラム

初期の大学

- 12世紀にパリとボローニャで大学が誕生
 - ・ 都市の中で誕生
 - ・ 学問を学びたい人たちが集まってできた組合
 - ・ パリは教師の大学、ボローニャは学生の大学
- 建物を持たない
 - ・ 自由に移動ができた
- 教員は教育者としての役割が期待
 - ・ 神学、法学、医学（聖職者、法曹、医者）
 - ・ 研究活動が大学の教員に期待されるようになったのは、19世紀になってから
- 国際性
 - ・ 大学における教授言語はどこもラテン語

大学教育の歴史



金子(2013)

カリキュラム

- カリキュラム
 - ・ 語源は、「競走路」や「人生の来歴」を意味するラテン語
 - ・ 広義には学習者に与えられる学習経験の総体
 - ・ 「教育機関が掲げる教育目的を達成するための学習体験の計画」
- 教育課程
 - ・ カリキュラムの中でも特に制度化された部分を指す行政用語
- 学位プログラム
 - ・ 「学生に短期大学士・学士・修士・博士・専門職学位といった学位を取得させるにあたり、当該学位のレベルと分野に応じて達成すべき能力を明示し、それを修得させるように体系的に設計した教育プログラム」
 - ・ 教員の所属組織の枠にとらわれずに、分野横断的なカリキュラムの編成も可能になるように、学修成果の視点で捉えなおすことを目指して提言された

課題 特色あるカリキュラム

- 特色あるカリキュラムと聞いて思いつくカリキュラムはどのようなものでしょうか。

特色あるカリキュラム

小学校と大学のカリキュラムの違い

小学校のカリキュラム	大学のカリキュラム
国による基準多い 学習指導要領 検定教科書 学年制 選択教科なし 年齢主義 履修主義 主に担任教員が授業 45分授業	国による基準少ない 大学設置基準 教科書のない授業も 単位制 選択科目多い 課程主義 修得主義 さまざまな教員が授業 90分授業など

大学設置基準における教育課程

- 教育課程の編成方針
 - ・ 第十九条 大学は、当該大学、学部及び学科又は課程等の教育上の目的を達成するために必要な授業科目を開設し、体系的に教育課程を編成するものとする。
 - ・ 2 教育課程の編成に当たっては、大学は、学部等の専攻に係る専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮しなければならない。
- 教育課程の編成方法
 - ・ 第二十条 教育課程は、各授業科目を必修科目、選択科目及び自由科目に分け、これを各年次に配当して編成するものとする。

法的には大学に大きな裁量

- 大学設置基準において、大学は大きな裁量が任されている
 - ・ 「体系的」「幅広く深い教養」「総合的な判断力」「豊かな人間性」
 - ・ 教科ごとの学習指導要領が定められ、検定教科書が用意されている小学校とは大きく異なる
- 大学が主体的にカリキュラムを編成する

単位制度

- 授業科目を単位と呼ばれる学習時間数に区分して修得していくモジュール方式（ロスブラット 1999）
 - ・ 各学年での教育課程の修了を繰り返すことによって学習していく学年制とは異なる
- 長所
 - ・ 選択制、柔軟性、学問の自由、他機関との接続
- 短所
 - ・ 高い費用、高い管理コスト、複雑な時間割の作成、一貫性の欠如、統合性の欠如、履修指導の必要性

単位の設計

- 卒業に必要な単位数
 - ・ 124単位以上
 - ・ 教室以外でのeラーニングは60単位を超えない
- 1単位
 - ・ 45時間の学修を必要とする内容
 - ・ 授業+授業時間外の学習
- 総学習時間の設計
 - ・ $45\text{時間} \times 124\text{単位} = 5580\text{時間}$

参考 単位制度の起源

- アメリカのハーバード大学
- 1869年に学長に就任したエリオット
- 決められた授業しか学生が履修できない状況を変え、単位制度と選択科目制が導入された。
- 結果として、カリキュラム編成の複雑化、履修指導の重要性にもつながった？

学外の参照基準や制約条件

- 大学教育政策
- 学習観の変遷
- 外部の各種基準
 - ・ 各種資格取得の要件
 - ・ 日本学術会議の各分野の教育課程編成上の参照基準
 - ・ 士力
- 入学者市場のニーズ
- 労働市場のニーズ
- 提携機関との協定
- 実習先などの協力機関
- ICT環境の変化

学内の参照基準や制約条件

- 教育理念や全学のDPなど
- 学校の立地
- 入学生有能力と意欲
- 教員
 - ・ 専門分野以外は教えられない
 - ・ 専門分野が軽視されるのを嫌う
 - ・ 担当授業数が増加するのを嫌う
 - ・ 非常勤講師の確保と予算
- 物理的制約条件
 - ・ 教室数、座席数、固定机かどうか、ICT環境、TA予算…

■ 大学のカリキュラムへの期待

課題 大学のカリキュラムへの期待

- 大学のカリキュラムには国や市場からどのような期待がされているのでしょうか。

大学のカリキュラムへの期待

大学教育政策における大きな流れⅠ

- 学位プログラム化
 - ・「学士課程教育を各教員の属人的な取組から大学が組織的に提供する体系立ったものへと進化させ、学生の能力をどう伸ばすかという学生本位の視点に立った学士課程教育へと質的な転換を図るためには、教員中心の授業科目の編成から学位プログラム中心の授業科目の編成への転換が必要である」（中央教育審議会 2012）
- 個別政策
 - ・ シラバス、3つのポリシーの設定と公表、アセスメントプラン、単位の実質化、ナンバリング、履修系統図、CAP制、学修ポートフォリオ、学修行動調査、学習成果の把握と可視化、ディプロマサプリメント、学部等連係課程制度

大学教育政策における大きな流れ2

- 知識習得から社会で活躍できる幅広い能力獲得
 - 学士力、非認知能力、コンピテンシー、汎用的能力、トランスファラブルスキル
- 教育方法
 - 発問・指示、アクティブラーニング、グループ学習、経験学習
- 評価方法
 - パフォーマンス評価、実技テスト、ルーブリック、自己評価、ポートフォリオ

愛大学生コンピテンシー

I. 知識や技能を適切に運用する能力	1. 必要な情報を収集・整理できる 2. 個別の知識や技能を相互に関連づけながら習得できる 3. 習得した知識や技能を基に自分の考えを組み立て、適切に表現（記述・口述）できる
II. 論理的に思考し判断する能力	4. 広い視野と論理的思考に基づき分析・解釈できる（例：クリティカル・シンキング／創造的思考） 5. 客観的根拠に基づき判断し、解決策を提示できる（例：意思決定・判断力／課題探求・発見・解決力）
III. 多様な人とコミュニケーションする能力	6. 様々な状況に応じて適切な対話・討論ができる（例：ダイアログ／ディスカッション／プレゼンテーション） 7. 目的達成のために多様な人と協働できる（例：協調性／チームワーク／リーダーシップ）
IV. 自立した個人として生きていく力	8. 自らの個性や適性を活かして行動できる（例：自己理解／自己決断／リフレクション） 9. 社会的関係の中で自分の行動を調整できる（例：順応性／セルフマネジメント／規範遵守）
V. 組織や社会の一員として生きていく能力	10. 他者を理解し、他者のために役立つことができる（例：お接待の心／ホスピタリティ） 11. 集団・組織の一員として自覚と誇りをもって行動できる（例：責任感／連帯感／帰属意識／愛校心） 12. 地域や国内外の課題を多様な観点から考察し、解決に向けて貢献できる（例：社会貢献／ボランティア／インターンシップ／留学）

「教学マネジメント指針」

- 中央教育審議会大学分科会（2020）
- 学修者本位の教育の実現
- 「供給者目線」から「学修者目線」へと転換
- 「内部質保証の確立に密接に関わる重要な営み」
- 教学マネジメントの推進
 - 「大学がその教育目的を達成するために行う管理運営」（中央教育審議会 2018）

「教学マネジメント指針」で示される意義

- 大学の教育目的の達成
- 学修者本位の教育の実現
- 密度の濃い主体的な学修
- 有限な資源の有効活用
- 内部質保証体制の確立
- 国際的な通用性
- 社会に対する説明責任

中央教育審議会大学分科会（2020）

学修者本位の教育

- 「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」において、高等教育が目指すべき姿として、「学修者本位の教育への転換」が提唱される
- 「学修者本位の教育」は「教学マネジメント指針」で49回使用される
- 「学修者本位の教育の実現とは、各高等教育機関の既存のシステムを前提とした「供給者目線」を脱却し、学位を与える課程（学位プログラム）が、学生が必要な資質・能力を身に付ける観点から最適化されているかという「学修者目線」で教育を捉え直すという根本的かつ包括的な変化を各機関に求めているものである。」

カリキュラムマネジメント

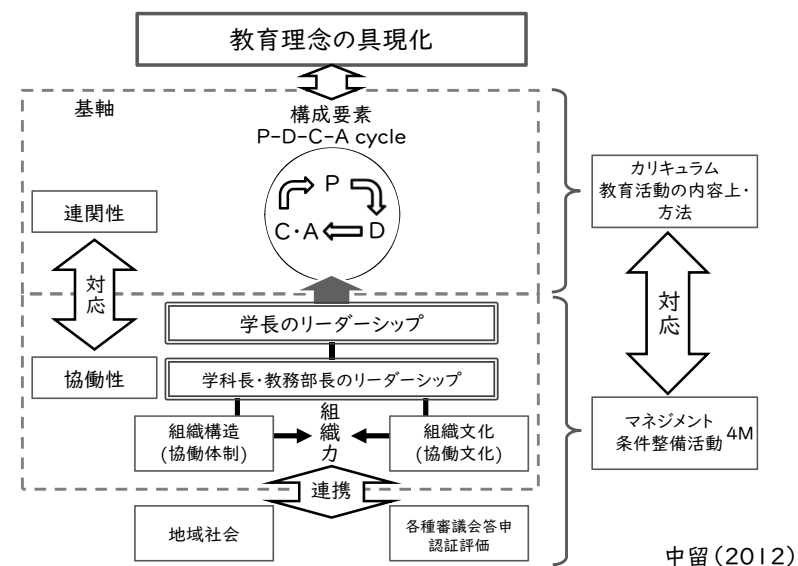
- 中央教育審議会（2016）『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』
- 「各学校が、学校の教育目標をよりよく達成するために、組織としてカリキュラムを創り、動かし、変えていく、継続的かつ発展的な、課題解決の営み」（田村 2011）
- 「大学のカリキュラムマネジメント」（中留 2012）

3つの側面

- カリキュラムの体系化
 - ・ 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- PDCAの確立
 - ・ 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。
- 資源の活用
 - ・ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

中央教育審議会（2016）

大学のカリキュラムマネジメント



■ カリキュラムの構成要素

カリキュラムの構成要素

- カリキュラムの編成における大きな裁量
- カリキュラムの構成要素を理解し、カリキュラムの全体像を構造的に把握しておく
- 現行のカリキュラムを構成要素ごとに評価して改善点を明らかにできる
- 大学が抱えている課題の解決に向けてどの構成要素を変えると効果があるのかも明確になる
- どの構成要素で大学の特色を打ち出していくのかを考えることができる

構成要素からみた課題

構成要素	5点満点	改善点
学習目標		
時間区分		
授業科目の設定		
授業科目の配列		
教育方法		
評価方法		
学生の履修の制御		
専攻分野の決定方法		
多様なニーズへの対応		
学習支援		
正課外活動の支援		
他機関の教育との連携		

学習目標

- ディプロマ・ポリシーの策定と公表
- カリキュラムの基点
- 職業人を育成する、市民を育成する、研究者を育成する
- 全学の学習目標、学部等での学習目標
- 検討すべき視点
 - ・ 学生の興味や能力の視点、専門分野からの視点、学生の就職先を含む社会からのニーズの視点

時間区分

- 学期の区切り方
 - ・ 1学期制（通年制）
 - ・ 2学期制（セメスター制）
 - ・ 3学期制
 - ・ 4学期制（クォーター制）
- 単位時間
 - ・ 60分授業、90分授業、100分授業、105分授業
- 開講頻度
 - ・ 週1回授業、週2回授業（連続）、週2回授業（月木、火金などの組み合わせ）

授業科目の設定

- 全体の開講科目数
 - ・ 学生の選択、少人数授業、教育目標との整合性、教員負担、非常勤講師費用
- 分化的アプローチ
 - ・ 親学問の体系によって細かく分類
 - ・ 代数学、幾何学、基礎解析学、数理解析学…
- 統合アプローチ
 - ・ 関連する学問の間を取り除いて関連性を高める
 - ・ 学際科目、領域横断科目
 - ・ 「社会科と理科ではなく生活科として指導しよう」
 - ・ 「ビッグバンから生物多様性までをインテグレート科学の1科目にして学ばせよう」

授業科目の配列

- シーケンス
- 一般的な配列の例
 - ・ 教養→専門基礎→専門、基礎→応用→発展、理解→練習→実践、習得→活用→探究、教員主導の教育→学生主導の教育
- 単純な積み上げだけではない
 - ・ アーリー・エクスポージャー（早い時期に仕事や学問の現場に出る機会）
 - ・ くさび型カリキュラム（専門教育、教養教育とも4年間を通じて履修）
 - ・ らせん型カリキュラム（重要な概念を中核として何度も繰り返す）
- ナンバリングで各科目の位置づけの明確化

教育方法

- 法令用語による分類
 - ・ 講義、演習
 - ・ 15時間から30時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもつて1単位とする
 - ・ 実験、実習、実技
 - ・ 30時間から45時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもつて1単位とする
- 教育方法による分類
 - ・ 講義法、アクティブラーニング、遠隔授業
- 教授言語
- メディア活用

評価方法

- 個々の授業における評価
 - ・ 明確な評価基準に基づいた厳格な成績評価
 - ・ 学生に対するフィードバック
- カリキュラム全体としての学生の学習成果の評価
 - ・ ディプロマ・ポリシーに照らした評価
 - ・ カリキュラム・ポリシーやアセスメントプランに整理して公表
 - ・ 卒業時の学習成果を高める工夫
 - ・ ルーブリック、レーダーチャート、ポートフォリオ、ディプロマサブリメント
 - ・ 中間期でのフィードバック

学生の履修の制御

- 必修科目、選択科目、自由科目
- キャップ制
 - ・ 同時に履修できる授業科目に単位数で上限を設定する制度
- 各授業の履修条件
 - ・ 履修できる学生の学年を明確にする
 - ・ 事前に指定した授業の単位を修得していないと登録ができない
- 各授業の履修者の上限設定
- 履修モデルの提示

専攻分野の決定方法

- 入学者募集時の選抜枠
 - ・ 一括入試（大くり入試）
 - ・ 学科・専攻単位での入試
- レイトスペシャリゼーション
- ダブルメジャー（2つの主専攻）、メジャーマイナー（主専攻と副専攻）
- 研究室配属のルール
- 転学部・転学科のルール
- 履修指導の体制

多様なニーズへの対応

- 習熟度別クラス編成
 - ・ 高校までの履修の有無、プレースメントテスト
- リメディアル教育
 - ・ 高校レベルの生物学、物理学、数学など
 - ・ eラーニングの活用
- 優等学位
 - ・ 選抜された学生を対象としたオナーズ・プログラム
- 飛び入学、早期卒業、長期履修

学習支援

- 学習支援のニーズ
 - ・ 選択肢の多い履修
 - ・ 専門分野の選択、免許や資格の取得、留学・・・
- 履修指導
- 学習相談
- クラス担任制
- ピアサポーター制度
- 学修不振の学生への対応

正課外活動の支援

- 正課教育
 - ・ カリキュラムの中の単位授与を行う学習
- 正課外活動
 - ・ クラブ・サークル・自主ゼミ・自治活動など
- 2つの間に活動を位置づける場合も
 - ・ 準正課教育
 - ・ 単位授与は行わないが大学・学部等が教育的意図をもって提供する教育・学習活動
 - ・ サービスラーニング、海外研修、インターンシップ、ボランティア活動など

他機関の教育との連携

- 他機関との連携
 - ・ 単位互換制度、連携開設科目制度、共同教育課程制度
 - ・ 学生の選択肢の拡大、教育資源の有効活用
 - ・ 大学設置基準で必要な授業を自ら開設することが原則として定められている
- 海外の大学などとの連携
 - ・ ダブル・ディグリー制度、ジョイント・ディグリー制度
 - ・ 留学や海外フィールドワークの期間の確保

課題 構成要素からみた課題

- 所属組織のカリキュラムにはどのような特徴と課題があるでしょうか。ワークシートの構成要素ごとに5点満点で評価をして、どこに改善点があるのかを明らかにします。

構成要素からみた課題

構成要素	5点満点	改善点
学習目標		
時間区分		
授業科目の設定		
授業科目の配列		
教育方法		
評価方法		
学生の履修の制御		
専攻分野の決定方法		
多様なニーズへの対応		
学習支援		
正課外活動の支援		
他機関の教育との連携		

カリキュラムの編成方法

編成というプロセス

- 理想を実現可能な形にする
 - ・教職員が考える理想を制限の中で実現可能な形に (Diamond 2008)
- 教職員の合意形成を促す
 - ・丁寧な説明と意見の反映を通して教職員が納得できる形に
- 規則にそって承認される
 - ・内部質保証に関して定められた規則
 - ・学部等の新設や改編の場合は設置認可

タイラー原理

1. いかなる教育目的を達成しようとするべきか
2. 教育目的を達成するために、いかなる学習経験を用意できるか
3. 学習経験はいかにして効果的に組織することができるのか
4. 教育目的が達成されたかどうかをいかにして判定できるか

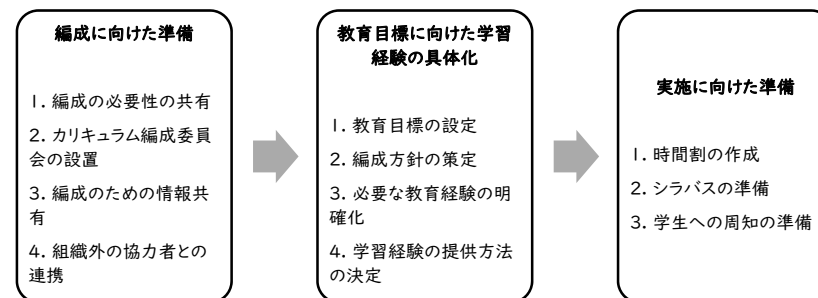
タイラー (1978)

逆向き設計

1. 求められている結果を明確にする
2. 承認できる証拠を決定する
3. 学習経験と指導を計画する

ウィギンズ・マクタイ(2012)

カリキュラムの編成の過程



編成に向けた準備

- 編成の必要性の共有
 - 学部等の新設や改編、定期的な見直し時期、環境の急激な変化
 - 何らかの課題解決を目指す活動
- カリキュラム編成委員会の設置
 - 主要な分野の教員、信頼されている教員、職員の役割、役職者による信任
- 編成のための情報共有
 - カリキュラム自体の知識、用語の整理、学生のデータ、政策動向、他大学の事例、研修の機会
- 組織外の協力者との連携
 - 教育の専門家、実習先の協力者、他大学の教員

学習経験の具体化

- 教育目標の設定
 - 編成の基点となる目標、複数回の会議
- 編成方針の策定
 - スコープとシーケンス、科目群の設定、授業科目数、カリキュラムの特色
 - カリキュラム・ポリシーは、編成に向けた方針を定めた文書というよりも、編成したカリキュラムの説明文書
- 必要な教育経験の明確化
 - 学習目標を達成する授業科目、現行の修正かゼロベースか、新規導入科目の検討、正課外活動
- 学習経験の提供方法の決定
 - 望ましい履修への導入、学年別の配置、履修条件、キャップ制、授業担当者の決定、非常勤講師の雇用

実施に向けた準備

- 時間割の作成
 - ・ 学生の望ましい履修、教室の決定、教員の教室や曜限への希望への対応
- シラバスの準備
 - ・ カリキュラムや学内方針にそったシラバス、シラバス作成ガイド、組織的な点検制度
- 学生への周知の準備
 - ・ 履修の手引き、相談できる窓口、オリエンテーション

改善の大きさの度合い

- 大きな改善
 - ・ 白紙の状態で教育目標から見直してカリキュラムを新たに編成する
 - ・ 教育機関の新設、環境の大きな変化、危機的状況、支援してくれるトップの存在、改組のタイミング、外部からの厳しい評価
- 小さな改善
 - ・ 現在のカリキュラムを前提に改善できる点を明らかにしていく
 - ・ 毎年のカリキュラムの改善

カリキュラム編成の課題解決の例

- 新しい学習目標の設定と対応した授業科目の設定
- 科目の属人化の克服
- 開講科目数の整理
- 科目間の重複の整理
- 学際科目、領域横断科目の導入
- アーリーエクスポージャーの導入
- 段階的なアクティブラーニングの導入
- 教員の負担軽減
- 時間区分の変更
- 評価結果に基づく課題解決

授業科目数の肥大化

- 授業科目数は増加する傾向がある
 - ・ 学生の学習の選択の幅の拡大
 - ・ 選択肢の豊富さは入試広報という観点でも魅力
 - ・ 学外からの新しい授業科目に対する要請
 - ・ 少人数授業の達成の手段
 - ・ ある程度の授業科目のラインナップの提供
 - ・ 教員が自分の専門分野の知識を提供する機会

授業科目数の削減の意義

- カリキュラムの意図が明確になる
 - ・ ディプロマ・ポリシーとの関係が明らかな授業科目について「内容の見直し」や「取りやめの検討」を（中央教育審議会大学分科会 2020）。
- 学生の学習行動に影響する
 - ・ 単位の修得の容易な授業、友人と同じ授業を選択する可能性
- 授業の質を高めることになる
 - ・ 教員の限られた時間の有効活用
- カリキュラムの運用を容易にする
 - ・ 運営コストの削減、長期的な継続性

課題 授業科目数の削減の方法

- 所属組織で授業科目数を削減することが求められたら、どのような方法で進めますか。

授業科目数の削減の方法

授業科目数の削減の方法

- 授業科目数の方針の共有
- 授業科目数の設定
- 目標による授業科目の精選
- 複数の授業科目の統合
- 受講者数のデータの活用
- 他学部等の授業科目の活用
- 開講頻度の変更

絵に描いた餅にしない

- カリキュラムを入念に編成しても、カリキュラムに
そって授業が実施できなければ・・・
- カリキュラムの意図を教職員と共有する
 - ・ 体系的な教育を実施できる
 - ・ カリキュラムを説明する場面がある
 - ・ 教育の質保証への関与を促す
- 教員にゆだねる裁量の明確化
 - ・ 過度な管理も過度な自由放任も不適切
 - ・ カリキュラムにそった授業

課題 カリキュラムの実施の工夫

- 編成したカリキュラムにそって授業が実施さ
れるために大学は何をすべきでしょうか。

カリキュラムの実施の工夫

カリキュラムの実施の工夫の例

- 各教員がDPやCPにそってシラバスに授業の目標、
内容、評価が書けるように支援している
- シラバス点検の規程が定められている
- 各教員が他の授業科目との関連性を意識して授業
が行えるようにしている
- 個々の科目群で授業担当者が情報共有を行っている
- 非常勤講師を対象とする説明会を開催している
- 学生向けの履修の手引きが教職員に配付されてい
る

■ カリキュラムの編成に向けて

課題 カリキュラムの編成の課題

- これまで学んでことを踏まえ、カリキュラムの改善に向けて何から始めることができるでしょうか。何が課題であり、具体的にどのような行動を行うのかなどを整理します。

カリキュラムの編成の課題

課題	解決方法	予想される困難

カリキュラムの編成の課題

課題	解決方法	予想される困難
DPが明確でない	DPで示す学習成果を明確にする	教員間の方向性の一致 大学執行部の協力
開講科目が多すぎる	開講科目の削減に向けた計画の策定	

カリキュラムの編成に向けて

- 大学のカリキュラムを編成するには、カリキュラムの基本的知識を構成員が正しく理解することが第一歩
- 特にカリキュラムの構成要素を理解すれば、大学が抱えている課題の解決に向けてさまざまな方法があることに気づく
- カリキュラムの改善は、さまざまな制約条件があるが、教職員間での継続的な対話と合意形成を踏まえて着実に進めていただきたい

参考図書



- 1 章 カリキュラムの編成の基本を理解する
- 2 章 カリキュラムの構成要素を理解する
- 3 章 カリキュラム編成の過程を理解する
- 4 章 カリキュラムの学習目標を定める
- 5 章 構成する授業科目を定める
- 6 章 授業科目を配列する
- 7 章 授業科目数を削減する
- 8 章 学生に望ましい学習を促す
- 9 章 カリキュラムの意図を教職員と共有する
- 10 章 カリキュラムの時間区分を見直す
- 11 章 大学等の設置手続きでカリキュラムを編成する
- 12 章 カリキュラムを評価し改善する

主な参考文献

- 愛媛大学教育企画室 (2015) 『データから考える愛大授業改善 Vol.01』
- 金子元久 (2013) 『大学教育の再構築』玉川大学出版部。
- 京都大学高等教育研究開発推進センター編 (2012) 『生成する大学教育学』ナカニシヤ出版。
- バートン・クラーク (有本章訳) (1994) 『高等教育システム—大学組織の比較社会学』東信堂。
- 佐藤浩章、中井俊樹、小島佐恵子、城間祥子、杉谷祐美子編 (2016) 『大学のFD Q&A』玉川大学出版部。
- ラルフ・W・タイラー (金子孫市監訳) (1978) 『現代カリキュラム研究の基礎—教育課程編成のために』日本教育経営協会
- 田中耕治編 (2018) 『よくわかる教育課程 第2版』ミネルヴァ書房。
- 田中耕治、三石初雄、水原克敏、西岡加名恵 (2005) 『新しい時代の教育課程』有斐閣。
- 田村知子編 (2011) 『実践・カリキュラムマネジメント』ぎょうせい。
- 田村知子、村川雅弘、吉富芳正、西岡加名恵編 (2016) 『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』ぎょうせい。
- 中央教育審議会 (2016) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)』
- 中央教育審議会大学分科会 (2020) 『教学マネジメント指針』。
- 中央教育審議会大学分科会大学教育部会 (2016) 『「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー)、「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)及び「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン』
- 中央教育審議会大学分科会 (2014) 『大学のガバナンス改革の推進について (審議まとめ)』
- 中井俊樹編 (2015) 『アクティブラーニング』玉川大学出版部。
- 中井俊樹編 (2019) 『大学SD講座1 大学の組織と運営』玉川大学出版部。
- 中井俊樹編 (2021) 『大学SD講座2 大学教育と学生支援』玉川大学出版部。
- 中井俊樹編 (2022) 『カリキュラムの編成』玉川大学出版部。
- 中井俊樹、鳥居朋子、藤井都百 (2013) 『大学のIR Q&A』玉川大学出版部。
- 中留武昭 (2012) 『大学のカリキュラムマネジメント—理論と実際』東信堂。
- 日本高等教育開発協会 (2019) 『カリキュラムコーディネーター養成研修会<初級編>〜組織がチームとして教育に取組むための仕組み作り〜』2019年1月26〜27日大阪大学豊中キャンパス研修配付資料。
- 日本高等教育開発協会、ベネッセ教育総合研究所 (2016) 『大学生の主体的学びを促すカリキュラム・デザイン』ナカニシヤ出版。
- 前田康裕 (2018) 『まんがで知る教師の学び3』さくら社。
- 松下佳代 (2016) 『アクティブラーニングをどう評価するか』松下佳代、石井英典 (編) 『アクティブラーニングの評価』東信堂。
- 文部科学省 (2020) 『平成30年度の大学における教育内容等の改革状況について (概要)』
- シェルダン・ロスブラット (吉田文、杉谷祐美子訳) (1999) 『教養教育の系譜—アメリカ高等教育にみる専門主義との葛藤』玉川大学出版部。



中井俊樹 (愛媛大学)

nakai.toshiki.us@ehime-u.ac.jp

<https://sites.google.com/site/nakaitoshiki/>

イラスト提供: あいはらひろみ